

積雪ゼロ

齊藤倫子 青森

くす玉がばかんと開いたやうな空へ絶賛雪融け中へのつぼん
積雪による遅延無く土ぼこり上げてはりきる早春のバス
海峡に白く漂ふ海月見ん積雪ゼロがうらさびしくて
玉手箱あけすこしづつ老いてゆく 竜宮城での育児終はりぬ
目鼻口ほつぺたで知る三月は眩しいそつとマスクはづして

栗鼠になりたし

金子智佐代 茨城

三か月振りの母なり車椅子のはは見て泣かぬわれに驚く
抗癌剤治療の弟と骨折の母とのあはひ右往左往す
小心のどーんと重きわが胃の腑今宵は夫の鍋にぬくもる
自慢などする人ぢやないと思ひぬし君がむかしを語る 老いたな
吹く風に遅れゆつたりゆつさりゆつとゆるるミモザよ栗鼠になりたし

星のにほひ

尾崎潤子 千葉

「星めぐりの歌」が聞こえてくるやうな夕べつめたき星のにほひす
庭隅の金魚の墓のある場所はかつて冬青せきよの木蔭でありき
風がまるくなりきたるらしきさらぎの窓に水仙の鉢植ゑを置く
吊り橋の真ん中あたりまで来ると少し揺らしてみたくなります
はるかぜはほこりつぽくて制服の友と別れし日の霞色

生中継

四野宮 和之 東京

マラソンの四年ぶりなる都庁まへすでに人去り歌会へ向かふ
半ラーメン、餃子三個と一本のお燗がひとりの三次会です
生中継にて気象台職員が手話まじへつつ「開花」を言へり
〈咲く〉〈散る〉の何れなるかなポスターが桜の樹下の市議選候補
朝乃山、落合のある十両を觀をりマスクのひとの減る春

出席番号

柴田 佳美 東京

ツナマヨのおにぎりなんて邪道だとおもへど握る時流にのつて
四月から出席番号男女別やめ混合にする子の中学は
ま四角の教室のなか若者が早苗のやうに揺れてゐる朝
つば広の帽子をかぶり歩くときのみどは蒼き茎となりたり
斥候を出してきたりぬ雀らの一羽わが家のペランダに来る

祖をのこして

黒石 孝 新潟

スノーリゾートへハクバから人の溢れ出しわが糸魚川へ魚食ひに来る
雪国の梅は三月 自転車を止めて雪解の野蒜採る人
山畑に玉ねぎの苗植ゑしまま婆は施設へゆきて戻らず
家跡の御影石の墓磨きあげ祖をのこして人は村を出る
手術してよく見える眼で凝視せり米国銀行の倒産の記事

オリーブ石鹼

中川 暁子 富山

玄関に大小の靴ひしめきて重なるもあり幸せ指数
内戦のシリアを思ひアレッポのオリーブ石鹼今宵も使ふ
一〇〇〇ピースのパズルの一片なくしたと服まで脱ぎぬわがをみなごは
なくしたるパズルのピース片恋のごとく思ひて少女は帰る
屋根雪がとけて流るる水音は豪雨のさまなり槌を震はせ

デンジャージーン

三浦 陽子 長野

圭ぢやない弱いでもない周ぢやないコイの旁をどわすれしたり
壕端に一列に立ち黒き鯉をのぞく園児の青帽子たち
呑みこんだことば気化して両方の耳からほそく出てゆく気配
近ごろのわれにたりない大音量トップガン見にゆかうと決める
けたたましくまた懐かしいヘデンジャージーン〜我がゆるみたる臓腑ふるはす

春の鹿

杉本 なお 静岡

遠くからわたしを狙ふ指鉄砲 だいぢやうぶ、ちやんと撃たれてあげる
急かされて咲きたるやうなタンポポの地に這ふ小さきひと株を見つ
オンライン会議で話すえらいひとの向かうに見える夕陽がきれい
薄切りの新たまねぎの透きとほり今日のあなたはご機嫌みたい
背に淡く影をまとひてやはらかな木々の芽吹きを食む春の鹿

コックスの声

桑原博 大阪

チは蒿雀あをじチチは頬白、目の下にほくろがあるかないかに似たり
まはしつつ袴をとりてあくをぬく弱火で煮詰め春はつくしんぼ
ずるずるとしよぼしよぼとして春がきてボードレールはもう読み終へた
疲れたくて疲れたくてゐた若き日に「パドルいこう」とコックスの声
O型のみながクロマニヨン人ならばわれはどこから来て飯を食む

イリノイ大学

田中泉 大阪

大阪を土曜の朝に発ちていま土曜の朝のシカゴに降りぬ
ドーナツとコーヒーとアドレナリンで時差の谷から身を起こしたり
電話越しの日暮れの声はくぐもつて娘と話すイリノイの真夜
明日よむ原稿に手を入れてゆく甘納豆をつまむまにまに
白いバスと風の走れり赤レンガ建築ならばイリノイ大学

さらば零士よ

やぎあきら 香川

キャツシングあるいはローン、クレジットみんな他人ひとから金借りること
腰廻り一巡工具ぶら下げて電気工事士空中泳ぐ
ひと部落墓処ひとつを抱へつつあかき夕日に鳥は暮れゆく
春来ぬと観天望気の亀が言ふ 黄経三百三十度のゆふべ
いま一度思ひを籠めて汽笛鳴るさらば零士よ銀河鉄道よ